

第 32 回目

「金曜日にここへ来て欲しい、とひとりの修道女に言ってください。」

1975年6月27日(金) 15時15分、礼拝堂にて

私は立ち去る準備ができていました。ところが光が現れ、続いてイエスがいつものように姿を現されました。

イエスは右手を私のほうへ差し出し、左手を体に沿って下げておられました

そして私に微笑まれ、こう言われました：

「この街に住んでいない修道女に、金曜日にここへ来て欲しい、と行ってください。

何か書くものを持って来るようにとも。

あなたの口を通して、私はあるメッセージを彼女に伝えます。」

それからイエスは一瞬私に微笑まれ、お消えになりました。



第 33 回目

「この手紙は、教会の長に宛てたものです。」

「... あなた方、教会の頭達、私は真に言いますが、この世に建てられた

この十字架によって、諸国の民は救われるのです。」

1975年7月4日(金) 15時15分、礼拝堂にて

主任司祭はロザリオの祈り三環を終えたところでした。

突然、光が現れ、イエスがまず私を、それからジャンヌ・ダルク修道女を見て、私に言われました：

「次のことを大きな声で言ってください。修道女はこれから言うことを書き留めるように。この手紙は、教会の長に宛てたものです。ナザレのイエスが、自分に仕える者の口を通して、あなたに伝えています。イエスは言います：

私の父に招かれ、このドズレの地で平安と喜びを見出す者は幸いです。けれども、私があなた方に建てるよう依頼している栄光の十字架の足元に世界中の人々が来て悔い改めるならば、どれほどその数は多くなることか。

何故なら今はもはや、私が体を蘇らせる時ではなく、霊を蘇らせる時だからです。次のことを良く理解しなさい。ノアの洪水が起こる前には、人々は全ての者を取り去ってしまった大洪水が来る時まで、何も疑いませんでした。けれども今あなた方は警告を受けています。今あなた方は、私が次のように言う時に生きています。

この地上には、あらゆる種類の混乱が起こることでしょう：貧困と飢えの原因である不正、諸国は不安のうちにあり、天にも地にも異常な現象としたりが現れます。またあなた方は、備えておきなさい。何故なら、大艱難が近いからです。それはこの世が始まって以来起こったことのないようなもので、その後にも2度と起こらないようなものです。あなた方に言いますが、今の若い世代はこれらのことが起こらないままその命を終えることはありません。けれども恐れてはいけません。何故なら、マドレーヌが東から西に向けて輝くのを見た人の子のしるしが、天に立つからです。

あなた方教会の長達、真に言いますが、この地に建てられた十字架によって、諸国の民は救われるのです。私の父はあなた方を救うため私をお遣わしになりました。そして今、私の慈悲を人々の心の中に注ぎ込む時が来ました。」

イエスは、声を低めて言われたので、私は大きな声では繰り返しませんでした：

「私のメッセージは引出しの影に眠ってはいなりません。それは世界全体にとっての真実であり、光でなければなりません。」

それから、再び声を上げられて：

「この栄光の十字架は、聖年の終わりに向けて立てられなければなりません。

この聖年は、栄光の十字架が建てられる時まで引き伸ばされなければなりません。

私のメッセージはこれで終了します。上司に付き添われて、このメッセージをあなた自身の手で教会の長に手渡すよう、私はあなたに命じます。」

それから、イエスは姿をお消しになりました。

ジャンヌ・ダルク修道女はイエスが依頼なされた通り、メッセージをきちんと書き留めました。

主はとてもゆっくりと語られたので、彼女には十分に書き留める時間がありました。

彼女はそれをローマ法王の元へ届けに行くため、大司教の命令が下るのを待つことになりました。

第 34 回目

「あなた方、私のメッセージを託されている司祭達、修道女達は、
人類が破滅に向かって走るがままにしているはいけません。」

1975年9月19日(金)、礼拝堂にて

この日、ブロン総長とジャンヌ・ダルク修道女は16時に司教と会うことになっていました。

いつもの金曜日と同様、私は礼拝堂へ行きました。そこで私はマリー・マルグリット修道女に会いました。彼女は私にこう言いました：「司教との面会は16時からです。」そこで私は礼拝堂から立ち去り、16時に戻って来てこの面会のためにロザリオの祈りを一環行いました。

私がこの一環のロザリオの祈りを終えるまで、イエスは私をお待ちになり、それから私は聖櫃のところに光があるのを見ました。誰も目の前に現れませんでした。ある声がわたしにこう言うのが聞こえました：

「司祭達、修道女達およびメッセージのことを知っている二人の人に、17時30分到这里へ来るように、と教えてください。」

それから光は消えました。

私は17時30分に礼拝堂に再び来ました。修道女が3人、主任司祭、そしてメッセージのことを知っていて、修道女達によって選ばれたT夫人とG夫人。

示されていた時間に、光が現れ、次いでイエスが私のほうに手を伸ばしてお現れになりました。

「平安がいつもあなた方と共にあるように。」

「十字を切りなさい。」(わたしはそのようにしました)

それからイエスは両手を胸の高さのところを組み、目を上げて、真剣に悲しげな様子で天を仰ぎ、言われました：

「父よ、あなたの御心がこの地上に成就しますように。」

主の眼差しは、深い悲しみに満ちていました。しばらくそのままの様子でおられた後、いつもの姿勢に戻られ、私におっしゃいました：

「次のことを大きな声で教えてください。」

この時、イエスはそこにいる人たちをご覧になりました。

主が私におっしゃるフレーズを私は繰り返しました。

「あなた方、私のメッセージを託されている司祭達、修道女達は人類が破滅に向かつて走るがままにしているはいけません。栄光の十字架が建てられるように、働きなさいと私はあなた方に頼みました。次々に起こる異常な現象を見て時が来たことが分からないのですか。何故なら時は過ぎ行き、私のメッセージは隠されたままです。

もしもこのままの状態が続くならば、救われる者の数は少ないでしょう。けれどもあなた方、私の父の御言葉を実行しない者は、大きな罰を受けることでしょう。何故ならあなた方は救った魂の数によって、裁かれるからです。人智や熟考を用いるのではなく、常軌を逸したこのメッセージを聞きなさい。何故ならこのメッセージによって、神はこの世を救いたいと望んでいるのだから。しるしを求めたユダヤ人のようであってはなりません。この唯一かつ最終的なメッセージによって、神はその仕える者に明かされました—彼女の口から発せられた御言葉は人間による言葉ではない—御霊が彼女に教えたように、私が私の慈悲を人々の心に注ぐべき時が来たのです。けれども私のメッセージを託された者達は、彼ら自身が私の邪魔をしていることを知りません。何故なら彼らはこの世を無知のままに放置しているからです。

覚えておきなさい。日々は選ばれた者達のために短縮されるであろうことを。けれども、神の御言葉を実行しない者たちは、なんと不幸であることか。」

それからイエスは私に言われました：「靴を脱いで礼拝堂から出なさい。あなたの足が地に達するところまで行って、ここに再び戻って来なさい。」私はイエスが言われた通りにしました。私が戻って来て主の前にひざまづいた時、主は私に言われました：

「私の父が聖別し神聖としたこのドズレの地は、私達にはその上に足を置く資格すらありません。」それからイエスは優しさと慈しみに満ちた御顔に戻られました。そして私に微笑まれ、私が大きな声で繰り返した、次の言葉をおっしゃいました：

「私は優しさと愛の神。私の慈悲は限りがありません。もしも私の今日の言葉が厳しいものだったとしたら、それはあなた方を非難するためではありません。逆に私は私のメッセージによって、この世を救いたいのです。」

それからイエスは姿を消されました。明らかにこれは二人の修道女に司教が投げか

けた質問への回答です。ちょうど同じ時に司教はしるしを求めているのです。人智と熟考を求めるドズレに対してイエスは悲しみを持ってお答えになったのです。

第 35 回目

「... 生涯彼らの上にはもはや、サタンの力は及びません。」

1975年12月5日(金) 18時45分、礼拝堂にて

聖体降福式が始まろうとしていました。小さな礼拝堂は人々でいっぱいでした。多くの人が集まっていたのにもかかわらず、光が現れたのに気づいた時私は喜びのあまりこう叫ばずにはいられませんでした：「光が現れた。」私は立ち上がって、降福された御聖体の前に行きました。すぐにイエスが私の目の前にお現れになりました。微笑みながら、私を迎えるかのように両手を差し出した姿勢で。なんと美しい光景、何という言いようのない穏やかさ。私にはもはや愛に溢れたイエスしか見えず、もはや礼拝堂の中にはいませんでした。もはや何も存在せず、私はもはや何も考えず、私自身の肉体を感じませんでした。私の肉体はその時、死んでいるのだと思います。イエスの霊に結合した私の霊しかもはや存在しないのだと思います。私達が死んだ時、きっとこんな感覚を味わうのだろう、と思います。イエスは私に言われました：

「あなたがこれから見ることを、大きな声で言ってください。」

この時、イエスは片手を胸の上に置かれました。私は、私が見ることを説明しなければなりません。イエスが私に頼まれたのですから。そこで私は、大きな声で言いました：「左手で、イエスは衣を胸元から払い... (イエスは私に微笑まれこう言われました：「その胸から」；私はそこで大きな声でこう言いました。)…その胸から、赤と白の光線が流れ出てくる。その右手は、私達の方に差し出されている。」イエスがとても穏やかな調子で私に口述なさるフレーズを、私は一つ一つ繰り返しました。「私の胸の炎が、私を燃え立たせる。」イエスは言われました。「以前にも増して、私はこの炎をあなた方ひとりひとりに流し込みたい。これから私は人類全体への私からの約束を伝えます。① それはあなた方が私のメッセージを知り、実践に移す時に実現されます。:

一 私は罪人たちの魂が陥っている苦しみを和らげます。

- 私は司祭達および修道女達の魂に、これまでの何倍もの恵みを与えます。なぜなら私のメッセージは、これらの魂によって知らされなければならないからです。
- 私は私の胸のそばに、敬虔で忠実な魂を置き、守ります。これらの魂は、カルバリでの受難途上にあつた私を力づけてくれたのです。
- 私は、異邦人および私のことをまだ知らない全ての人々が、私のメッセージを知つたその瞬間に、豊かな恵みを注ぎ込みます。
- 私は教会全体に、異端者および背徳者の魂を引き寄せます。
- 私は、私の胸のうちに子供たちおよび敬虔な魂を受け入れます。彼らが、天におられる私達の父への特別な愛を持ち続けるために。
- 私は、私のメッセージを知って、最後まで耐え抜く人々に、あらゆる恵みを与えます。
- 私は煉獄にいる魂達の苦しみを和らげます。私の血は、彼らの火傷痕を消します。
- 私は最も頑なな心、私の心を何よりも深く傷つける凍りきつた魂達を暖め、蘇らせます。
- 私は、栄光の十字架の足元に来て悔い改め、私が教えた祈りを毎日折る者達に約束します。生涯彼らの上にはもはや、サタン力は及ばず、どれほど汚れた生き方をしていたにせよ、瞬時に彼らは清くなり、永遠に神の子となります。

限りない慈愛に満ちた私の父は、破滅の淵にいる人類を救いたいと願っておられます。この最終的なメッセージに従い、あなた方は備えなさい。あなた方がもはや信じなくなった時にこそ、このメッセージが実現されることを知っておきなさい。なぜならあなた方は、私が栄光の中に再臨する日にちも、時間も知らないからです。」

イエスとその約束を私に語っておられる間中、赤と白の光線が絶え間なく彼の胸から流れ出ていました。それから、いつもの姿勢に戻って、私に言われました：

「20日後に、あなたは9日間祈禱を始めなさい。この祈禱は月の最初の金曜日に終わるでしょう。わたしは毎日あなたのもとに来て、この祈りを教えます。この祈禱は聖年を延長させます。」 そうです、イエスは私に「20日後に」とおっしゃいました；その日は1975年クリスマスの日でした。この20日間というもの、私は待ち遠しい思いで、祈り、黙想しながら過ごしました。私は毎日日を数えました。私は大きな喜びに

包まれていました。私はまるで、フィアンセが出掛けて行った後、20日後に戻って来るのを今か今かと待ちわびる若い娘のようでした。ああ、私のイエス、何とこのイエスを待つ期間の甘美な日々であったことか。私は毎日ため息のうちに過ごし、1日が終わると、こう言いました：「後これだけ待てばいいのだから。」そしてまた、間もなく主に再びお目にかかれるのだ、と思いました。この待ちわびる日々は、私にとって甘く、けれども同時に大変長く感じられました。そして、クリスマスイブの日が来ました。クリスチャンにとって、クリスマスは救い主の誕生日です。何と素晴らしい日であることか、この救い主の誕生日は！けれども、この年のクリスマスの日、私にとって格別喜びの大きな日でした。救い主が、私に会いに来られる。私はこの愛そのもののイエスに、とても強く結びついているように感じました。この慈悲深いイエスに。真夜中のミサは、まさに誕生でした。私は、世界中のこと、全ての不幸な人々、取り残された人々、不信仰な人々に思いを馳せました。私はイエスに、私が感じているこの大きな喜びを彼らにも分け与えてください、と願いました。イエスがその友にお与えになる、私を天にまで引き上げるほどの、霊的な喜びを。私はこの年の甘美なクリスマスの夜中、眠るべきではありませんでした。約2千年前に、このクリスマスの日、神は私達全てを救うため、その息子イエスをお与えになりました。この同じクリスマスの日、この同じイエスが、私達にその優しさ、慈悲深さ、そして主の約束を与えるため、ドズレの小さな礼拝堂に来られました。何とこの1975年のクリスマスの日、素晴らしかったことか。

- ⑪ 比較：慈悲の使徒、修道女フォステイヌの約束。1934年、イエスは修道女フォステイヌ—1993年4月18日列福—に言われた。《人類は信頼を持って私の慈悲に助けを求めないならば、平安を見出すことはないであろう。



「9日間祈祷」「第1日目」「人類は、私のメッセージを知らず、それを実践に移さないならば、平安を見出さないでしょう。」

1975年12月25日—クリスマス— 15時15分— 最初の日、礼拝堂にて

私は礼拝堂に15時に到着しました。イエスが来られると分かっていたので、私の心臓は激しく打ち、息を静めることが出来ずにいました。

私は約15分ほど待ちました。私にはまるで終わりのない時の様に長く感じられました。私はあまりにも嬉しくて、祈ることさえ出来ませんでした。

15時15分ちょうどに(教会の鐘の音を聞いたのです)、御聖体のある場所に光の輪が見えました。いつものように、私は前に出て行きました。

この時、私の胸は強く打つのをやめていました。私にはまるで心臓の鼓動がもはや打っていないように感じられました。命が私から去ってしまったような感じでした。

私はひざまづきました。イエスはこの光の中にお現れになりませんでした。けれども私にはある強い声が聞こえてきました：

「神が人類に語られた。メッセージを託されている者達は、その声に聞くように。彼らの信仰のなさのために、世界中は、地上の4隅を揺さぶる大艱難に見まわれるであろう。あなた方が今生きているこの時は、苦しみの始まりでしかない。人類は、私のメッセージを知らず、それを実践に移さないならば、平安を見出さないであろう。」

この声を聞き、大きな声で繰り返した後しばらく経って、イエスは私の目の前に姿を現され、こうおっしゃいました：

「これから8日間、毎日ここに来てくださいますか？ あなたは私が口述する9日間祈祷を毎日行うことになります。限りない慈愛に満ちた私の父は、破滅を避けるため、世界にそのメッセージを伝えたいと願っておられます。これまでにも増して、私は失望のうちにあるすべての魂に、私の恵みを豊かに注ぎ込みたいのです。これから私は、一つ一つの魂への約束を伝えます。私のメッセージを知り、それを実践に移す時、この約束は実現されます。」

この時、イエスは胸に片手を置かれました：衣を除かれた時、赤と白の光線がそこから流れ出てきました。もう片方の手は、私のほうへ、あなた方のほうへ、世界に向

けて差し出されていました。

イエスは言われました(私はひとフレーズずつ繰り返しました。):

「第1日目、私は罪人たちの魂が陥っている苦しみを和らげます。」

「私と一緒に言ってください:『天にまします我らの父よ、願わくは御名をあがめさせたまえ、御国を来らせたまえ、御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いだしたまえ。』」(イエスはこの祈り全てを、大変ゆっくり私と一緒におっしゃいました。)

「3度言ってください。:『めでたし、聖寵充ち満てるマリア、主御身と共にまします。御身は女のうちにて祝せられ、御胎内の御子イエスも祝せられ給う。天主の御母聖マリア、罪人なる我らのために、今も臨終のときも祈り給え。』」(私はひとりで言いました。)それから私は繰り返しました:

「主よ、どうかあなたの苦難に満ちた受難によって、私達、世界中を憐れんでください。いと高きところにおられる神に栄光があるように、地にある主に愛される者に、平安と喜びがあるように。」

イエスは言われました:「あなたはこれらを毎日言うことになります。」

それから主は消えていきました

第 37 回目

「第2日目。」

「私は司祭達および修道女達の魂に、これまでの何倍もの恵みを与えます。なぜなら私のメッセージは、これらの魂によって知らされなければならないからです。」

1975年12月26日 17時15分より - 第2日目、礼拝堂にて

光が見え、次いで主が前夜と同じようにお現れになりました。

左手を胸の上に置いておられました:そこから赤と白の光線が流れ出ていました。

左手は世界に向けて差し伸ばされていました。

イエスは私に繰り返し言うように、とはおっしゃいませんでしたが、フレーズをひとつ言う毎に彼は私が続けて繰り返し言うのを待っておられるのに気づきました。

「第2日目。私は司祭達および修道女達の魂に、これまでの何倍もの恵みを与えます。なぜなら私のメッセージは、これらの魂によって知らされなければならないからです。」 それからイエスは言われました：

「天にまします我らの父よ」、次いで私はひとりで祈りを続けました。

イエスはこうおっしゃいました：

「めでたし、聖寵充ち満てるマリア、を3度言ってください。」、私は続けてひとりで3度天使祝詞を言いました。主は続けて（私は繰り返し言いました）：

「主よ、どうかあなたの苦難に満ちた受難によって、私達、世界中を憐れんでください。いと高きところにおられる神に栄光があるように、地にある主に愛される者に、平安と喜びがあるように。」

イエスは左手を元に戻して、両手を私の方へ伸ばされ、微笑まれてから消えてゆかれました。

第38回目

「第3日目。」

「私は私の胸のそばに、敬虔で忠実な魂を置き、守ります。

これらの魂は、カルバリでの受難途上にあつた私を力づけてくれたのです。」

1975年12月27日 17時15分より - 第3日目、礼拝堂にて

席から、私はいつものように光が目の前に現れるのを見ました。

私が立ち上がった瞬間、イエスが両手を広げ私の方に差し出された姿勢で、姿を現されました。私はその前に進んでひざまずき、お辞儀をしました。

このとき、赤と白の光線がその胸から流れ出ていました。主はおっしゃいました。：

「第3日目、私は私の胸のそばに、敬虔で忠実な魂を置き、守ります。

これらの魂は、カルバリでの受難途上にあつた私を力づけてくれたのです。」

それからイエスは言われました：

「天にまします我らの父よ」、次いで私はひとりで祈りを続けました。

イエスは引き続いて：

「めでたし、聖寵充ち満てるマリア」、私は続けてひとりで3度天使祝詞を言いまし

た。彼は続けて：「主よ、どうかあなたの苦難に満ちた受難によって、私達、世界中を憐れんでください。いと高きところにおられる神に栄光があるように、地にある主に愛される者に、平安と喜びがあるように。」

イエスは私に依頼なさいました：

「十字を切ってください。」 私はそのようにしました。そしてイエスは姿を消されました…。その胸から流れ出る光線は、あらゆる悔い改めた罪人、加護を祈る全ての人の上に降り注がれる筈です。

第 39 回

「第 4 日目。」

「私は、異邦人および私のことをまだ知らない全ての人々が、私のメッセージを知ったその瞬間に、豊かな恵みを注ぎ込みます。」

1975年12月28日17時15分より - 第4日目、礼拝堂にて

席から、私は光を見ました。すぐにイエスが私のほうに両手を広げて、目の前にお現れになりました。私に微笑まれ、こう言われました：

「第 4 日目。」

こうおっしゃりながら、いつものようにイエスはゆっくりとした動作で、左手で胸の衣を開かれました。そこから赤と白の光線が流れ出てきました。彼は右手を私の方に差し出されました。手の平がはっきりと見えました。

それから、私はイエスがおっしゃることを繰り返しました：

「私は、異邦人および私のことをまだ知らない全ての人々が、私のメッセージを知ったその瞬間に、豊かな恵みを注ぎ込みます。」

イエスは言われました：「我らの父よ」 私は「我らの父よ」は言わず、イエスに続いて、「天にまします」と続けたように思います。(注:フランス語で語られたため、日本語に訳すと「天にまします」と「我らの父よ」が前後する)

それからイエスは言われました：「めでたし、聖寵充ち満てるマリア」 そこで私はひとりで続けました。2回しか言わなかったような気がします。

「主よ、どうかあなたの苦難に満ちた受難によって、私達、世界中を憐れんでくださ

い。」この時、イエスは左手を胸から下ろされました。両手を前に差し出して、目を天に向け、より強い調子でおっしゃいました：「いと高きところにおられる神に栄光があるように、地にある主に愛される者に、平安と喜びがあるように。」それからイエスは私をご覧になって、おっしゃいました：「十字を切ってください。」それから姿を消されました。

第 40 回目

「第 5 日目。」「私は教会全体に、異端者および背徳者の魂を引き寄せます。」

1975 年 12 月 29 日、18 時 30 分 - 第 5 日目、礼拝堂にて

この日、子供達は自宅にいたので、私は別の日のように 17 時に礼拝堂へは行けませんでした。また私はその時、そこへ行くよう招かれている気がしませんでした。

家族は 18 時に出掛けて行き、突然 18 時 30 分に何か私に礼拝堂へ行くよう突き動かしました。礼拝堂に着いてすぐに私は光に気づき、次いでイエスがいつものように目の前に姿を現されました：

「第 5 日目。」

彼の胸から光線が流れ出ていました。私はフレーズ毎に繰り返しました：

「私は教会全体に、異端者および背徳者の魂を引き寄せます。」

「天にまします我らの父よ...」

「めでたし、聖寵充ち満てるマリア...」

イエスは「めでたし、聖寵充ち満てるマリア」を 3 度おっしゃいました。多分前日私が 1 回分言うのを忘れたからでしょう。それから私は繰り返しました：

「主よ、どうかあなたの苦難に満ちた受難によって、私達、世界中を憐れんでください。」「いと高きところにおられる神に栄光があるように、地にある主に愛される者に、平安と喜びがあるように。」「十字を切ってください。」—「はい。」

彼の両手はゆっくりと下げられていきました。イエスは私をご覧になり、微笑まれ、消えていかれました。